

Contents

\*\*\*\*\*

特集：米大統領選の出口調査を読む	1p
< 今週の”The Economist”誌から >	
”Now, unite us” 「さあ、統合へ」	7p
< From the Editor > 「大統領選挙の勝ち組、負け組」	8p

\*\*\*\*\*

特集：米大統領選の出口調査を読む

世紀の選挙が終わり、世間の関心は急速に収まっているようです。おそらくこれが「ケリー-新政権誕生」であれば、マスコミ的にはもっと大騒ぎできたのですが、「ブッシュであと4年」という平凡な結論に、拍子抜けした感もあるのかもしれません。

他方、米国では詳細な出口調査の結果をはじめ、続々と関連データが公開されています。その中には、今後の米国政治や社会の動向を占う重要な示唆を与える材料が少なくありません。「米大統領選挙オタク」の本誌としては、もう少し腰を落ち着けて選挙結果の分析に精を出してみることにしたいと思います。

出口調査を読む

2004年米大統領選挙は、ブッシュが「一般投票で51%」「ケリーと360万票差」で勝ったことで、「大勝」であったことは間違いがない。が、「楽勝」であったとは思われない。

ほんのちょっとしたことで、結果は大きく変わっていたはずである。たとえば当日の天候がオハイオ州で晴れて、フロリダ州が雨であったなら。民主党側の投票日直前の盛り上がり、もう少し早く始まっていたら。あるいは当日の朝、ケリー支持者が投票所に行列を作っている映像がテレビで流れずに、「これは大変だ」と保守派が大挙して投票に出かけなければ。

際どい勝負の中身を詳しく分析するために、CNNのサイトで公開されている選挙戦の出口調査を読み込んでみた<sup>1</sup>。次ページの表はその一部である。2004年のみならず、今後の投票動向を予測する上でも有用なデータだと思う。

<sup>1</sup> <http://us.cnn.com/ELECTION/2004/pages/results/states/US/P/00/epolls.0.html>

2004年選挙の出口調査から

		<b>Bush</b>		<b>Kerry</b>	Nader	
		<b>2004</b>	2000	<b>2004</b>	2004	
性別	<b>Vote By Gender</b>					
	Male	46%	<b>55</b>	2	<b>44</b>	0
	Female	54%	<b>48</b>	5	<b>51</b>	0
	<b>Are You Married?</b>					
	Yes	63%	<b>57</b>	4	<b>42</b>	0
No	37%	<b>40</b>	2	<b>58</b>	0	
人種	<b>Are You Married With Children?</b>					
	Yes	28%	<b>59</b>	n/a	<b>40</b>	0
	No	72%	<b>48</b>	n/a	<b>51</b>	0
	<b>Vote by race</b>					
	White	77%	<b>58</b>	4	<b>41</b>	0
African-American	11%	<b>11</b>	2	<b>88</b>	0	
Latino	8%	<b>44</b>	9	<b>53</b>	2	
Asian	2%	<b>44</b>	3	<b>56</b>	-2	
Other	2%	<b>40</b>	1	<b>54</b>	2	
思想	<b>Vote by Party ID</b>					
	Democrat	37%	<b>11</b>	0	<b>89</b>	1
	Republican	37%	<b>93</b>	2	<b>6</b>	0
	Independent	26%	<b>48</b>	1	<b>49</b>	0
	<b>Vote by Ideology</b>					
Liberal	21%	<b>13</b>	0	<b>85</b>	1	
Moderate	45%	<b>45</b>	1	<b>54</b>	0	
Conservative	34%	<b>84</b>	3	<b>15</b>	0	
宗教	<b>Vote by Religion</b>					
	Protestant	54%	<b>59</b>	3	<b>40</b>	0
	Catholic	27%	<b>52</b>	5	<b>47</b>	0
	Jewish	3%	<b>25</b>	6	<b>74</b>	0
	Other	7%	<b>23</b>	-5	<b>74</b>	1
None	10%	<b>31</b>	1	<b>67</b>	1	
政策	<b>Most Important Issue</b>					
	Moral Values	22%	<b>80</b>	n/a	<b>18</b>	1
	Economy/Jobs	20%	<b>18</b>	n/a	<b>80</b>	0
	Terrorism	19%	<b>86</b>	n/a	<b>14</b>	0
	Iraq	15%	<b>26</b>	n/a	<b>73</b>	0
	Health Care	8%	<b>23</b>	n/a	<b>77</b>	0
	Taxes	5%	<b>57</b>	n/a	<b>43</b>	0
	Education	4%	<b>26</b>	n/a	<b>73</b>	0
個性	<b>Your Vote For President Was Mostly...</b>					
	For your Candidate	69%	<b>59</b>	n/a	<b>40</b>	0
	Against His Opponent	25%	<b>30</b>	n/a	<b>70</b>	0
	<b>Kerry Mostly Says What....</b>					
He Believes	40%	<b>5</b>	n/a	<b>94</b>	0	
People Want to Hear	56%	<b>84</b>	n/a	<b>15</b>	1	

地域	<b>Vote by Size of Community</b>					
	Urban	30%	<b>45</b>	10	<b>54</b>	0
	Suburban	46%	<b>52</b>	3	<b>47</b>	0
	Rural	25%	<b>57</b>	-2	<b>42</b>	0
浮動票	<b>When Did You Decide Who to Vote For?</b>					
	Today/Last 3 days	9%	<b>44</b>	n/a	<b>53</b>	0
	Earlier Than That	91%	<b>52</b>	n/a	<b>47</b>	0

### 性別：男はブッシュ、女もブッシュ？

ブッシュ対ケリーは、男性で55対44、女性は48対51の比率になっている。米国の場合、「男性は共和党、女性は民主党」というのが定番になっており、民主党は男性票で共和党を上回することは滅多にない。ということは、十分な女性票を確保できなかったことが、ケリーの敗因ということになる。選挙の序盤戦から、「ケリーは女性に人気がない」と言われていたことが最後まで祟った形である。

逆に2000年選挙に比べて、女性票を5Pも多く獲得したことがブッシュの勝因であったといえる。どういう女性がブッシュに投票しているかといえば、家庭環境でいうと「独身のケリー、既婚のブッシュ」という傾向がある。子供が居る世帯では、さらにブッシュ支持率が高くなる。今回の選挙では、子供の安全に関心の高い”Security Mom”が、テロへの恐怖からブッシュ支持に回ったと見られている。90年代には、子供を放課後にサッカーに通わせる”Soccer Mom”が、厚いクリントン支持層と呼ばれた。それが2004年はブッシュ支持に転じたわけで、「子供を持つ母親」は今後の選挙戦でも重要なターゲットとなるだろう。

### 人種：ラテン系の動きに注目

2000年選挙では白人の投票が81%を占めていたが、2004年は77%に低下した。この傾向はおそらく今後も続く。ハンチントン教授が指摘するように、米国社会において白人が占める比率は、将来的には5割程度にまで低下し続けるだろう。

そうした中で注目されるのが、移民の増加と高い出生率により、アフリカ系を抜いて第2位の勢力になりつつあるラテン系の投票動向である。結果は、ブッシュ陣営が2000年に比べて9P増の44%であった。民主党側から見ると、こうしたマイノリティ票で大きくリードできないのは痛い。ラテン系は「家族の価値重視」という点で保守的であり、またカトリック教徒が多いことから人工中絶への反対が根強いのが響いたようだ。

今回の選挙で、2000年と結果が違ったのは3州のみだが、そのひとつニューメキシコ州は、ラテン系のリチャードソン知事を擁し、文字通りラテン系票の行方が焦点となった。同州を最後に制したのはブッシュである。2004年選挙のポイントのひとつがここにあった。

今後の米国政治においても、ラテン系の動向は重要な要素といえるだろう。

## 思想：保守化傾向続く

2004年選挙に投票したのは、民主党37%、共和党37%のイーブンだった。これが2000年では民主39%、共和35%だったので、共和党の投票者が増えていることになる。選挙戦直前に、民主党が若年層を中心に大規模な動員に成功したという報道がされていたが、むしろ4年かけて地道に行ってきた共和党の動員の方が、効果があったということになる。

また、投票者を「リベラル、穏健、保守」で分類すると、2004年は「21%、45%、34%」でやはり保守が優位である。ちなみに2000年は「20%、50%、29%」であった。全体に保守化が進むとともに、リベラル派も少し増えており、「両極化」が進んでいる様子である。

ブッシュとケリーの選択については、当然のことながら「共和党＝保守」はブッシュ、「民主党員＝リベラル」はケリーという形になる。2000年に比べ、投票行動の党派色が強まっていることが窺える。他方、民主党員（37%）とリベラル（21%）の差を考えると、16%の人は「自分は民主党員だがリベラルではない」と認識していることになる。やはり今日の米国では、「リベラル」は否定的なニュアンスが強くなっているようだ。

## 宗教：信仰心が厚い人はブッシュ

あわせて8割を占めるプロテスタント、カトリックの信者の双方で、ブッシュが順調に得票を伸ばした。なかでも衝撃的なのは、カトリック教徒であるケリーが、カトリック票の獲得でブッシュに遅れをとったことだ。ケリーは人工中絶を認める「プロチョイス・カトリック」という少数派に属しており、そのことが祟ったようである。

逆に「無信仰」の有権者は、ケリーが2対1の割合で獲得している。信仰の深い人はブッシュ支持、無宗教はケリー支持という傾向がはっきりと表れており、たとえば「教会に毎週行く人」（41%）は、ブッシュ61%、ケリー39%だが、「まったく行かない人」（14%）はブッシュ36%対ケリー62%となる。

何かと評判になる「福音派」（Evangelical/Born-Again）は白人人口の23%を占めるが、このクラスターの投票行動はブッシュ78%対ケリー21%となる。カール・ローブ戦略では、2000年選挙で動かなかった「宗教的右派」400万票を動員することを目指しており、その目標はほぼ達成されたようである。

ちなみに米国には、「宗教的左派」というものも存在する。ユダヤ教徒、黒人バプティスト教会、メソジスト教徒、プレスビテリアン教徒などである。これらリベラル寄り宗教グループは、かつては活動的だったものの、近年は政治色を薄めている。民主党の中でも左派に属するロバート・ライシュ元労働長官は、過激な保守勢力に対抗するために、民主党はこうした宗教界の左派勢力を動員する必要があると主張している<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> 『アメリカは正気を取り戻せるか』（東洋経済新報社）

## 政策：イラクや経済よりモラル

出口調査でもっとも意外性があり、もっとも頻繁に引用されているデータが「最も重要な政策課題」である。「道徳倫理」(Moral Value)が22%で最大の項目となり、これを選んだ人の80%がブッシュに投票している。イラクよりも経済よりもモラルなのである。

かくして「道徳倫理」と「テロ対策」が重要だという人はブッシュを、「経済」と「イラク」が重要だという人はケリーを選んだ。その結果として、普通ならばもっと注目されてしかるべき「医療」「税制」「教育」などの政策テーマが割り食った形である。間もなく始まる高齢化社会を前に、果たしてこれで良かったのかどうかは疑問が残る。

ちなみに2000年の出口調査では、重要テーマは以下の順であった。経済雇用(18%)、教育(15%)、税制(14%)、年金(14%)、国際情勢(12%)、医療(8%)、高齢者医療(7%)。モラルという言葉はまったく見当たらない。

## 個性：「反ブッシュ」よりも好感度

ちょっと物悲しさを感じさせるデータを紹介しよう。7割の人は、自分が推す候補者のために1票を投じているが、「対立候補に反対するために」投票した人が4人に1人もいる。そのうちの7割がケリーに投票しているので、実に全体の2割近くの人が「とにかくブッシュにだけは勝たせたくない」からケリーを選択したことが窺える。

さらに「ケリーは自らの信念を語っている」と思うのは4割だけで、「人々が聞いたがっていることを語っている」と見ている人が56%もあった。なおかつ、その中の15%がケリーに投票しているのは、文字通り「苦渋の選択」と称する以外にないだろう。

逆にブッシュ支持者は、それほど悩まずに投票しているようだ。結局、両者の明暗を分けたのは好感度の差かもしれない。ブッシュは”Favorable”53%対”Unfavorable”46%であるのに対し、ケリーのそれは47%対51%であった。

## 地域：都市部でも田舎でもブッシュ

有権者が住んでいる地域の規模によって、「都市」(30%)、「郊外」(46%)、「田舎」(25%)に分けてみると、なるほど「ケリーは都市部で強く、ブッシュは田舎で強い」。

が、ブッシュの都市部の得票は2000年に比べて10Pも上昇している一方、田舎での得票はむしろ減っている。おそらく全体の投票率が上がったことにより、「普通は政治に関心がないが、なんとなくブッシュに好感を持っている人々」の投票行動が色濃く反映されたのではないだろうか。

## 浮動票：事前の予想も、意外と大差なし

最後に、今回の選挙では全体の8~9割が早くから投票行動を決めており、残り1~2割の「態度未定有権者」を奪い合うという煮詰まった戦いであった。常識的に考えれば、投票日直前に投票行動を決める無党派層は、現職よりは挑戦者に味方するのが普通なので、「支持率での2~3%差は十分に逆転が可能」であると見られてきた。

ところが「投票日の当日、ないしは3日以内に決めた」という全体の9%の有権者は、ブッシュ44%対ケリー53%の対比となり、それほど大きな差とはならなかった。意外といえば意外な結果だが、カール・ロープはこの結果を見通していたようで、投票日1週間前のフォックステレビとのインタビューの中で、「態度未定有権者は保守的または穏健な伝統的有権者だ。彼らの間では、ブッシュ支持率は49~50%で一定している」と述べている。結果的に、この見方が正しかったことを出口調査は裏付けている。

## 2004年選挙の教訓

最後に全体の感想をまとめておこう。

- (1) ブッシュの「大勝だが辛勝」という評価は変わらないにしても、共和党の明らかな「作戦勝ち」であった。

日本シリーズにたとえるならば、両軍ホームゲームを勝って3勝3敗、最終戦にまでもつれこんだが、終わってみれば「こっちが勝って当たり前」に見える。最後は監督の技量の差で決まった、という印象。

- (2) 投票率の上昇を追い風にしたのは、「分かりやすいメッセージ」と「高い好感度」を有するブッシュだった。逆にケリーは、「信念のない政治家」と見られてしまった。

元大統領首席補佐官のレオン・パネッタは、選挙戦中のケリーに対して「有権者というものは、自分の地区の候補者に信念があると知っていれば、その信念の中身にまでは関心を持たないものだ」というアドバイスを贈っている。その言葉通りの結果だったといえよう。

- (3) 共和党は同性愛結婚や人工中絶問題など、「道徳的価値観」を争点に構えたことにより、信仰心の厚い層の集票に成功した。

もっともイラク情勢や経済・雇用状況が極端に悪化しなかったから、社会問題に注目が集まったともいえる。その意味では、2008年に同じ手が通じるかどうかは分からない。

- (4) 米国社会の保守化というトレンドに変わりはない。増加するラテン系人口も味方につけつつあり、共和党の優位は長期間にわたって続く可能性がある。

民主党の出方が難しい。敗戦によって左派が先鋭化するようだと、米国社会の党派色がますます強まってしまうだろう。「自分探しの旅」の答えが出るだろうか？

< 今週の”The Economist”誌から >

"Now, unite us"  
「さあ、統合へ」

Cover Story  
November 6<sup>th</sup> 2004

\* 先週号ではケリー支持を表明したThe Economist誌ですが、ブッシュ再選という結果に「これはお墨付きではなく、チャンスである」と述べています。

< 要旨 >

米大統領選はブッシュがきわどく制した。だが共和党の勝利を過小評価してはならない。ケリーは渋々敗北を宣言したが、ブッシュは一般投票で350万票も上回っていた。驚くべきことに、ブッシュは明らかな過半数を確保した。民主党が躍起になって確保した高い投票率は、米国の保守派の力を立証することになったのである。

ブッシュは議会においても確かな基盤を得た。十分なリードを持つ下院において、さらに4議席を上積みした。上院では4議席を上積みし55対44の勢力となった。あとは民主党保守派の力を借りれば、60議席に達してフィリバスターを乗り越えることができる。

前回、最高裁の力を借りてホワイトハウス入りした「事故による大統領」は、ついに真の負託を得た。高価な戦争とまだら模様の経済にもかかわらず、慶賀すべきことである。問題は今後どうするか、ケリーの勝利を祈っていた他の世界がどう反応するかである。

ブッシュはかつて9/11の直後、90%の国民と世界のほとんどの支持を得ていた。まだアブグレイブもファルージャも知られていなかった。CS細胞や同性愛結婚もなく、財政赤字は許容範囲内だった。そんな過去のことよりも、未来のことが問題だ。

ブッシュはイデオロギーよりも現実主義に徹するべきだ。歴史に名を残したければ、1期目のような衝撃と畏怖は不要だ。再統合を目指すかどうか、まずは新閣僚に一人でも民主党員をつけるかどうかテストになる。次は重病のレンキストに代わる最高裁判事に、宗教的右派を指名するようなら、またまた文化戦争に火が点くだろう。

そして財政問題に着手する必要がある。1期目の大統領は放漫財政だった。それはもう終わりにせねばならない。ベビーブーマー世代の引退により財政的な問題に直面するからだ。ブッシュは年金を民営化し、医療保険口座を作り、「オーナーシップ社会」を作ると語った。彼はまた税制改革を進めて保守主義と現実主義の融合を図るべきだ。

だが外交問題こそ、注目されねばならない。大統領が抱える問題はイランからスーダン、北朝鮮からイスラエルにまたがる。ここでも新閣僚人事が鍵になる。イラクの問題を見ても変化が必要なのは明らかだ。まずはラムズフェルド国防長官を辞めさせることだ。

選挙戦の間中、ブッシュは勇敢にもイラクでの責務にこだわり、中東民主化をあきらめなかった。行動を伴わせることが必要だ。まずイラクには、より多くの米兵が必要だ。グアンタナモの問題や、イスラエルへの肩入れがある限り、米国は不完全なセールスマンと見られてしまう。2期目の大統領として、ブッシュはアラブの支持を得るために働くべきだ。

ブッシュの仕事は、同盟国がその手助けをし、彼自身が歩み寄るときのみ成功のチャンスがある。ブッシュはWTO交渉において多国間主義を示すことができる。欧州の指導者たちも現実に直面しなければならない。両者の利害は基本的には同じである。過去の喧嘩にこだわるよりも、欧州が米国と協調する方が得るものは多い。それは平和なイラク、核のない中東、暴力のないパレスチナなどだ。ともに何をすべきか語り始めるべきときだ。

1期目のブッシュは、目指す方向は正しかったが執行段階でつまづいた。2期目をより上手にやるためには、新しい雰囲気と戦術が求められる。そして内外の支援も欠かせない。

### < From the Editor > 大統領選挙の勝ち組、負け組

今回の大統領選挙について、AP通信の政治記者、Ron Fournierが勝者と敗者を以下のよう

に描いています<sup>3</sup>。

恐怖 憎悪：  
ブッシュ陣営が武器とした「変化への恐怖」が、民主党の”Anybody But Bush”に打ち勝った。

インターネット テレビ広告：  
ディーンやケリーはネットで数百万ドルの献金を得た。他方、両陣営あわせて6億ドルを投じたテレビ広告によって、2000年と態度を変えたのはわずかに3州であった。

レッドステーツ ブルーステーツ：  
赤い州はより赤く、青い州は残り少なくなった。中西部でも共和党が浸透しつつある。

カール・ローブ ロバート・シュラム：  
ブッシュが「アーキテクト」と呼ぶ参謀ローブは、右寄り戦略で勝利をもたらした。民主党コンサルタントのシュラムは、仲間内の戦いの方が忙しかった。

先制攻撃主義 外交：  
ケリーは、先制行動には「グローバル・テスト」にパスすることが必要だと説いたのだが...

527条組織 選挙資金規正法：  
政党の陰で活動する527条組織が大活躍し、その存在を許した選挙資金法が敗北。

保守派 穏健派：  
保守派が同性愛結婚禁止の住民投票を11州で成立させ、議会をますます右寄りにする一方で、先鋭化する左右両派の狭間で居場所を無くしたのが穏健派。

N R A A C T：  
National Rifle Associationは、メディア宣伝攻勢でダッシュル上院院内総務の落選に成功。  
American Coming Togetherは、ケリー応援に1億ドルを費やしたものの、300万票足りなかった。

<sup>3</sup> Conservatives Win, Moderates Lose in 2004 (Nov 4)



戦いに勝った、負けたはつきものですが、こうして見るといかにも「しこり」が残りそうな選挙結果でした。勝者は和解と統合を望むものの、敗者の心理は微妙なものになるでしょう。「向こう4年間は何もいいことがない」という絶望的な気分になっても不思議はありません。

世界の安定のためにも、米国の統合が待たれるところですが、そういう理屈はさておいて、物事はそうそう簡単には進まないだろうな、という気がしてきました。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

〒107-0052 東京都港区赤坂2-14-27 <http://www.sojitz-soken.com/ri/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com)